

# 観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成三十年三月十日(土曜日) 午後二時三十分開演

演目解説(金沢能楽美術館学芸員 山内 麻衣子)

## 狂言 佐渡狐(やどぎつね)

都の領主のもとへ年貢を納めに上る越後と佐渡の百姓が二人。道すがら、佐渡に狐がいるかいないか口論になり、腰の刀を賭けて御館みたちの奏者そうしやに判を頼みます。狐はいると言いつ張りながら、狐を知らない佐渡の百姓は、前もつて奏者に袖の下を贈り、狐の特徴を教わっておいて、越後の百姓の問いにどうにか答え、奏者に勝たせてもらいます。しかし、狐の鳴き声を問われて窮し、「月星日つきほしひと鳴く」(これは鶯の鳴き声)の言い逃れは通じません。

## 能 融(とおる)

東国方から出た僧(ワキ)が都は六条河原の院に来てみると、汐汲みの老人(前シテ)が現れて塩竈しおがまの浦の風情を懐かしむ様子です。ここは洛中、汐汲みとは意外ですが、老人にいわせると、融おとどの大臣が塩竈の浦に模した庭園ゆえに浦人を汐汲みと称して当然です。折から中秋の名月が出ました。往時の遊舞を思い返しながら、老人は河原院に移された塩竈の浦のいわれを語ります。風景模写というこの壮大な風流を、大臣亡き後は相続する人もなく、荒れまざる一方です。昔が慕われてならないと嘆いた老人は、求めに応じて都の四方を見はるかにして僧に名所の数々を教え、興に乗じて汐汲みの業を披露したかと思うと、汐曇りに紛れて姿を消します(中入)。やがて僧の夢に現れた融(後シテ)は、八月十五夜の月下を晴れやかに舞い遊びます。河原院の栄花を心に復しつつ、今いる月宮殿を重ね見せるかのようです。夜明けに月光が薄まるのと共に融は面影を残して昇天します。(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

装束附 前シテ(老翁) 尉髪をつけ、三光尉又は笑尉の面をかける。

後シテ(河原左大臣) 初冠をいただき、色鉢巻をしめ、中将の面をかける。